# 江戸がお金づくりの中心に

徳川家康は、いろいろな制度を整備していくなかで、お金のしくみ(通貨)も整えた。江戸時代には、金貨、銀貨、銭貨(銅貨)の3種類のお金が発行されていたが、幕府はその製造所と役所を江戸に設けた。

## <小判は金座でつくられた>

小判などの金貨は、金座という製造所でつくられた。徳川家康は京都の貨幣づくりの職人、後藤庄三郎光次に命じて、江戸の本両替町に金座を設けた。金座は江戸時代のはじめには、京都、駿府(現・静岡県)、佐渡にもあったが、のちに江戸だけになった。

**小判づくりのようす≪金座絵巻≫より**

❶小判のもとになる地金を焼いてやわらかくしてのばす。

❷小判の幅にのばした細長い板を切り、重さを計る。

❸もう一度焼いてやわらかくして小判の形にする。

❹小判のすじを入れ、木づちでたたいて形を整える。

❺砂でみがいたり、塩でこすったりして金色に仕上げる。

❻小判の形や重さなど仕上がりを確認し、本物の証の印(極印)をおす。

## 江戸時代のおもなお金の種類

一般に流通しているお金には、小判や一分金などの金貨、丁銀や豆板銀、一分銀などの銀貨、一文銭などの銭貨があった。このうち、金貨と銭貨は重さや大きさが一定だったが、丁銀や豆板銀は重さが一定ではなく、重さを計って取り引きした。金貨には、一般に流通しないがおくりものやごほうびとして使われる大判(十両)もあった。

**金貨**
小判は世界でも類を見ない大型金貨だった。ほかに、二分金、二朱金、一朱金などもある。

**銀貨**
おもに関西を中心に使われ、「関東の金使い、関西の銀使い」といわれた。江戸中期には、五匁銀、一分銀など、大きさや重さが一定の銀貨ができた。

＊匁とは重さの単位で3.75g。

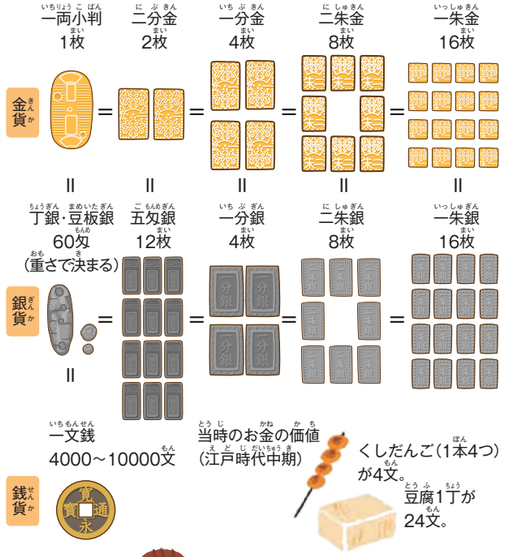
一分銀
金貨と同じように大きさや重さが一定の銀貨。

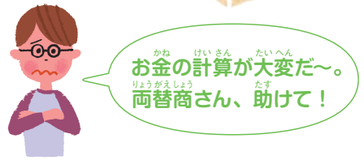
**銭貨**
一般の町人にいちばんなじみのあるお金。日常生活で使われた。




### ●3つのお金の単位としくみ

お金の単位は現在は「円」だが、当時は、「両」「分」「朱」「文」などがあった。江戸の金貨と関西の銀貨を交換するときの値段は一定ではなく、現在の円とドルのようにたびたび変動した。




### ●包みのまま使えたお金

江戸時代には、包金・包銀という一定額の金貨や銀貨を和紙で包んだものがあった。包み紙に金座、銀座、両替商などの名前が書かれていたために信用され、中身を開くことなく取りあつかわれた。おもに儀礼やおくりものとして使用されていた。

天保小判五十両包。

## 銀座を江戸に統一

銀貨をつくる銀座は、京都、駿府、大坂、長崎にもあったが、1612(慶長17)年に駿府の銀座を江戸の京橋南に移し、その後、江戸にすべて統一された。製造だけでなく、銀貨の材料となる地金の購入を行う役所としての役割もあった。

**人形町にも銀座があった**
最初の銀座は、現在の銀座二丁目にあったが、銀座役所の経営不振などにより、寛政の改革(→p.64)で大改正が行われ、蛎殻町(現・日本橋人形町一丁目)に移転した。新しい銀座は蛎殻銀座とよばれた。

## 金座の「後藤家」の名にちなんだ一石橋

一石橋は江戸時代からある古い橋だ。日本橋川をはさんだ北側に金座を任された後藤家、南側には呉服屋の後藤家があった。昔の体積の単位の「斗」や「石」から、後藤の名を5斗ともじり、後藤(5斗)と後藤(5斗)で合わせて10斗、10斗=1石というだじゃれから、一石橋の名がついたともいわれる。

## 両替商が大活躍

江戸時代のお金のしくみは複雑で、相場(取り引きするときの値段)も変わることから、金、銀、銅の交換を専門とする両替商という商人が活躍した。両替商はやがて人々のお金を預かったり、お金を貸したり、遠くの場所にお金を送ったりする、銀行のような役割も果たすようになった。

両替商の店頭のようす。そろばんで計算する人の奥には、天びんばかりで重さを量る人のすがたも見える。

❗金座は最初に後藤庄三郎光次が開いたことから、後藤庄三郎家によって代々受けつがれ、後藤役所ともよばれた。

❗江戸時代の通貨には、金銀銭貨のほかに、もろもろの藩が独自に発行した藩札(その領内に限り通用した紙幣)もあった。